大手前大学論集　第16号（2015）pp. 21－35

ゼバスティアン・ブラント『阿呆船』„Von gytikeit“（「貪欲のこと」）に関する語学的考察

大　島　浩　英

要　旨

アルザスの人文主義の詩人ゼバスティアン・ブラントによって1494年に出版された風刺詩集 Das Narrenschiff（『阿呆船』）には、当時の社会を象徴するような様々な愚か者が登場する。これらの愚者たちが繰り広げる愚行を、中世キリスト教的な倫理規範に基づいて厳しく戒めるためにブラントはこの詩集を書き、その批判は腐敗したキリスト教会自身にも向けられた。そのためこの書物は出版当初から多くの民衆に支持され、また印刷技術の普及も影響して大ベストセラーになったと言われている。本稿では、この詩集に収められた「貪欲（Geiz）」をテーマにした詩 „Von gytikeit“ を対象に考察を行った。

語学的には、格変化語尾の脱落、二重母音化する以前の語形、不定関係代名詞としての der と wer の併存、平叙文および副文における定動詞配置の不安定さ、強変化動詞の３人称単数現在形において地域差により幹母音にウムラウトが起こらない現象、３人称変化語尾 t に関する Ekthlipsis、二重否定による否定の強調などが見られ、現代語とは異なる点、あるいは接近している点などがこの初期新高地ドイツ語のテキストにおいて確認された。

キーワード：初期新高地ドイツ語、ゼバスティアン・ブラント、阿呆船、風刺文学、アルザス、ドイツ語学

はじめに

本稿では、アルザスの人文主義者で詩人のゼバスティアン・ブラントが1494年にバーゼルで出版した風刺詩集 Das Narrenschiff（『阿呆船』）を資料として取り上げ、

そこに記述された初期新高地ドイツ語の詩の表現について語学的な考察を行った。当時の社会のあらゆる層で見られた多くの愚かな行為。これらの愚行を行う阿呆たちを満載した阿呆船（愚者の船）が「阿呆国」（Narragonien）をめざす、というのがこの詩集の設定である。その中でブラントは、それらの愚行に対して痛烈な批判を行っているが、その際に判断の規準としたのは、中世ヨーロッパのキリスト教（カトリック）的倫理観であった。そしてその批判は腐敗した教会自身にも及んだが、ブラントによる様々な批判は、根底において中世キリスト教世界での七つの大罪（Hauptsünden）に集約される。そこで本稿では「高慢（Hochmut）」、「貪欲（Geiz）」、「大食（Völlerei）」、「肉欲（Wollust）」、「嫉妬（Neid）」、「憤怒（Zorn）」、「怠惰（Trägheit）」の罪源のうち、「貪欲（Geiz）」を題材にした詩 „Von gytikeit“ を対象に、語学的分析を行うことにする。

なお、この詩は基本的に二行一組で脚韻を踏む形式（Paarreim）で書かれているが、以下の和訳では韻律に関係なくできるだけ逐語訳を行い、また原文には５行ごとに行数を付した。

使用テキスト

原文：

Sebastian Brant: Das Narrenschiff. Studienausgabe. Hrsg. von Joachim Knape. Stuttgart 2005.（Reclams Universal-Bibliothek Nr. 18333）S. 118–120.

現代語訳：

Sebastian Brant: Das Narrenschiff. Übtrg. von H. A. Junghans. Hrsg., Anm. u. Nachw.: Mähl, Hans-Joachim. Stuttgart 1964. Bibliographisch ergänzte Ausgabe 1992.（Universal-Bibliothek Nr. 899）S. 18–20.

上記および次の各テキストに付された注釈を適宜参考にした。

Sebastian Brant: Das Narrenschiff. Hg. von Felix Bobertag. Berlin u. Stuttgart 1889.（Deutsche National-Litteratur. Hg. von Joseph Kürschner, Bd. 16）S. 14–16.

Zarncke, Friedrich: Sebastian Brants Narrenschiff. Leipzig 1854.（Hildesheim 1961）S. 305–306.

略語：mhd. 中（世）高（地）ドイツ語、frnhd. 初期新高（地）ドイツ語、
nhd. 新高（地）ドイツ語

本文中の Junghans、Bobertag、Zarncke に関する記述は、すべて上記の文献からの引用である。

I

原文	[3]（題詩）	現代語訳
Wer setzt sin lust vff zyttlich gůt		Wer setzt die Lust in zeitlich Gut,
Vnd dar jnn̄ sůcht sin freyd vnd můt		Sucht *darin* Freud und guten Mut,
Der ist eyn narr jnn lib vnd blůt		Der ist ein Narr mit Fleisch und Blut.
世俗の財産の上へ己の欲を置き		
その中に喜びと悦楽を探し求める者		
そのような者は生身の阿呆者		

題詩 1 行目の lust「喜び」（4 格）は Mhd. では男性、女性両方の性を持ち、これが16～17世紀の上部ドイツ語では主に男性名詞として用いられていたが[1]、現代語では女性名詞として定着している。このように lust の性の区別が不安定なことに加えて、その前に置かれた所有代名詞 sin（= nhd. sein）の語尾に -en あるいは -e などの格変化語尾がなく無語尾で使用されているため、lust の性を明確に特定することは困難である。またこれに続く vff は Mhd. の vf に対応し、nhd. auf のように二重母音化がまだ行われていない。この vff による前置詞句は方向を表す 4 格と考えられるが、形容詞 zyttlich（< mhd. zitlich → nhd. zeitlich「世俗の」）に語尾が付加されておらず、格表示が不明瞭である。前述の sin と同様に 2 行目の sin freyd vnd můt でも、所有代名詞 sin に複数 4 格の語尾が付加されておらず無語尾の用法がみられるが、これらは韻律との関係によるものとも考えられる。この行の freyd は Nhd. では Freude となり、ey から eu への母音変化が起こる。そして次の můt について、Bobertag ではこれを Stimmung「気分」の意味とし、ここでは gute, frohe Stimmung「上機嫌」と解する説明を加えている。従って můt には、本来からその語自身に gut「良い」という positiv な意味合いが含まれていることが推測される。この můt に関して Zarncke では、gůter můt = schmaus「ごちそう、宴会」という意味も指摘されており、ここでは「美食」に溺れる愚を述べたものとする解釈も考えられる。

また Zarncke は次行の jnn lib vnd blůt に対して in fleisch und blut という注釈を加え、さらに Junghans / Mähl も mit Fleisch und Blut のように現代語訳している。Nhd. で Leib と二重母音化する以前の語形をとどめた lib は、Leib und Seele「肉体と霊」という対応で用いられる Leib ではなく、Fleisch und Blut「血の通った生身の肉体」という具体的な人間の意味としてここでは用いられている。さらに Bobertag は mit Haut（皮膚） und Haar（髪）「すっかり、丸ごと」と説明し、正真正銘の narr「阿呆者」であることを強調している。この題詩は 3 行とも gůt、můt、blůt で脚韻を踏

んでいる。

Ⅱ

Von gytikeit.	Von Habsucht
貪欲について	

題名の gytikeit という語では、形容詞を名詞化する機能を持つ -keit が語尾に付加されているが、y が ei に二重母音化された Nhd.の形容詞 geizig「貪欲な」にはこの語尾は付加されず、*Geizigkeit ではなく Geiz が geizig の名詞形として現代語では用いられる。この語が現代語訳では Habsucht（= Habgier「強欲、所有欲」）という別の語に置き換えられている。

Der ist eyn narr der samlet gůt	Der ist ein Narr, wer sammelt Gut
Vnd hat dar by keyn fryd noch můt	Und hat nicht Freud noch frohen Mut
財宝をかき集める者は阿呆者	
それでいてその際、喜びもせず上機嫌でもなく	

ここでは der samlet gůt の der が不定関係代名詞 wer としても用いられ、der が関係詞としての包括的な機能を担っていることがわかる。この用法と同様の表現が題詩の冒頭行 „Wer setzt sin lust vff zyttlich gůt“ にも見られ、ここでは現代語と同様に wer に導かれる関係文が先に置かれているが、これに対して１行目の文では、不定関係代名詞として用いられた der を受ける指示代名詞 der が先に文頭に置かれているため、強意的構文に近いものとも考えられる。

音韻面に関しては、samlet が nhd. sammelt となり、省略される母音 e の位置が移動しており、これは33行目の samlet にも見られる。また gůt の ů が二重母音から Nhd. では u と単母音化する。２行目の dar by は Nhd. では dabei と１語で表記され、by が bei と二重母音化されるが、原文では２語に分けて書かれており、これは題詩２行目の dar jnn̄ にも見られる。これらについては Nhd. への移行において、語の結合から語形成への変化が認められる。

keyn fryd noch můt では、現代語訳において nicht Freud noch frohen Mut となり、keyn ～ noch ～が nicht ～ noch ～として、keyn（= nhd. kein）と nicht の用法にずれが見られる。またここで用いられている fryd という語形は、単母音 y が Nhd. で eu へと二重母音化した Freude「喜び」に対応するものだが、この fryd に対して

Zarncke は Druckfehler（誤植）の可能性を指摘しており、さらにこれに関連して fräd, freud, frewd という語形についても言及している。

1 行目、2 行目ともに関係文内での定動詞後置は韻律の関係からか行われておらず、gůt、můt で脚韻を踏んでいる。

Vnd weyß nit wem er solches spart	Und weiß nicht, wem er solches spart,
So er zům finstren keller fart	Wenn er zum finstern Keller fahrt. [*sic*]
誰のためにその富を蓄えるのかもわからない	
暗い地下の穴蔵へ行ってしまうのに	

3 行目の文は、1 行目で不定関係代名詞として用いられている der に導かれた関係文の内容と考えられ、solches は gůt を受ける指示代名詞である。この文の spart に関して Zarncke は、„Der samlet sparts eim andren man.“「（財貨を）集める者は、他人のために蓄えている」という古いことわざを注釈として加えている。

4 行目の so は「条件（もし～ならば）」を表す従属接続詞だが、この場合は 1 行目からの意味的関連から、条件の意味に加えてさらに認容文としての意味合いも想定できるように思われる。またこの副文章では、定動詞 fart が文末に置かれて定形後置が行われており、現代語の語順へと移行する一段階にあると考えられる。さてこの fart は mhd. varn, varen に対応し、3 人称単数の er が主語の場合は mhd. vert, veret（= nhd. fährt）のように幹母音が変音するはずだが、ここではその現象は起こっていない。Frnhd. ではこのような場合「上部ドイツではウムラウトしない傾向が強い[2)]」ため、ここでは変音しなかった fart と 3 行目末の spart とで脚韻を踏むことが可能となっている。なお現代語訳でも、文末での押韻のため fahrt としてウムラウトしていない語形が表記されている。また、1 行目の frnhd. samlet → nhd. sammelt のように、ここでも frnhd. finstren → nhd. finstern となり、省略される e 音の位置が Frnhd. と Nhd. とで異なっている。

Bobertag では keller「地下室」を Grab「墓」と解釈し、ここに ins Grab「墓の中へ」という説明を加え「死」を暗示している。

Vyl narrechter ist der verdůt	5	Ein größrer Narr ist, wer vertut
Mit üppykeit vnd lichtem můt		Mit Üppigkeit und leichtem Mut
浪費するのはますますもって大ばか者		
傲慢に、そしていい気になって		

5行目の der は1行目と同様に不定関係代名詞 wer として用いられており、題詩では不定関係代名詞としての wer という語も現れているため、ここでは同じ機能を持つ両方の語が競合していることが分かる。また、verdůt においては nhd. vertut となるように、有声閉鎖音 d から無声音 t へ、二重母音 ů から単母音 u への変化が見られる。vyl narrechter では、mhd. narreht が比較級で用いられている。mhd. narreht は、narr に語の概念を強調する eht が結合した形容詞だが、これは mhd. toreht（= nhd. töricht）「愚かな」にも見られる語形である。

6行目の üppykeit は mhd. üppecheit, üppekeit に対応するものだが、e → y への母音変化が見られ、nhd. Üppigkeit の語形へと接近していることがわかる。また lichtem では nhd. leicht のように二重母音化する前の長母音 i が現れている。なおこの行でも、můt が題詩の場合と同様に Stimmung「気分」の意味で用いられている。5行目、6行目は verdůt と můt で脚韻を踏む。

Das so jm got hat geben heyn	Das, was ihm Gott gab als das Seine,
Dar jnn er schaffner ist allein	Darin er *Schaffner* ist alleine,
神が阿呆に恵んだもの（財宝）を	
それは神のみが自由にできるもの	

7行目では、文頭の das を指示代名詞、それに続く so を定関係代名詞として、das so で不定関係代名詞 was の意味が表現されているように思われ、この関係詞節が5行目 verdůt「浪費する」の目的語になっていると考えられる。行末の heyn は nhd. Heim に対応し、Bobertag によれば anheimgegeben、übergeben という説明がなされていることから、「神がその阿呆者に（判断を）ゆだねたもの」という解釈ができる。さらにこの heyn については、Zarncke が „gut, vermögen“「財産」という説明を加えている。従ってこの行は、「神が阿呆者に使い道をゆだねた財産」という意味に読めるのではないだろうか。また、ここでは過去分詞としての geben に ge- が付加されない状態で用いられているが、geben は本来から完了相の意味を持つ動詞であるため、完了を表す接頭辞 ge- をさらに付加する必要性がなかったものと思われる。[3)]

8行目の schaffner については Knape によって Verfügungsberechtigter「処分権を持つ者」という注釈が加えられており、また Junghans / Mähl も Verwalter「管理者」という説明をしていることから、阿呆者に与えられた財宝が、神によってのみ支配されるものであることがわかる。なお、ここでも dar と前置詞 jnn が分かち書きされて1語にはなっておらず、独立した語の組み合わせとして記述されている。これら2行は heyn、allein で脚韻を踏む。

Vnd dar vmb rechnung geben můß		Wovon er Rechnung geben muß,
Die me gilt dan ein hand vnd fůß	10	Die mehr einst gilt als Hand und Fuß.
それ故に（神は）清算を求めるに違いない		
その精算額は片手、片足以上の価値がある		

8行目と同様に9行目でも dar vmb が分けて記述されており、前置詞との融合形がまだ定着していない。ここでは定動詞 můß が後置されており、副文章内での語順が整えられていることから、8行目の dar jnn、あるいは9行目に主語の er が省略されているとすれば dar vmb が関係代名詞として機能し、関係文を形成しているように思われる。

10行目の die は関係代名詞として9行目の rechnung を受けている。その関係文の中では me（= nhd. mehr）～ dan（= nhd. als）～の形式で比較表現が使われており、ここでは新しい als ではなく古い用法の dann（denn）が「～よりも」という意味で用いられている。この denn は現代語でも、als との重複を避けるために使用される語である。そして „ein hand vnd fůß“ という表現については、Junghans / Mähl が「手足切断刑の暗示」という注釈を加え、さらに Zarncke は「通常右手と左足の切断は現実に行われた刑罰である」とも説明しており、この詩が書かれた時代背景が垣間見られる。ここでは můß と fůß で脚韻を踏んでいる。

Ⅲ

Ein narr verlåßt sin fründen vil	Ein Narr läßt seinen Freunden viel,
Sin sel er nit versorgen wil	Die *Seele* er nicht versorgen will;
阿呆は親しい人々に多くのものを遺し	
己が魂のことなど気にもせず	

11行目の fründen は mhd. friunt の複数形 friunde が3格で用いられたものと思われ、vrünt の形も中部ドイツでは見られた[4]。なお iu は mhd. liute → nhd. Leute「人々」のように二重母音化するため、mhd. friunt も nhd. Freund へと変化する。そしてここでは fründen が3格で入っているため、定動詞 verlåßt は viel を4格目的語にとって「～に～を残す」という意味で用いられているものと考えられる。なお、Nhd. の所有代名詞 sein に対応する sin には格変化語尾が付加されず無語尾で使用されている。このことは12行目の sin sel にも言え、女性単数4格を示す変化語尾が欠落している。また、sel では長音の e がまだ二重書きされておらず、語尾の e も省略

されている。この行では wil が文末に置かれ定形後置の語順が行われているため、これによりこの wil は11行目の vil と押韻する。

Vnd vo̊rcht jm brest hie zitlich gut　　Er fürchtet Mangel in der Zeit
Nit sorgend / waß daß ewig důt /　　Und sorgt nicht für die Ewigkeit.
そしてこの世での富が彼に欠乏することを恐れる
来世がどうなるのかなど心配することもなく

13行目では、文末の zitlich[5] gut（= nhd. zeitliches Gut）「俗世の財産」を主語として、これが欠乏する（brest < mhd. bresten）対象に阿呆者を３格でとる表現が行われ、そしてこの文全体が vo̊rcht「恐れる」の内容を表している。行末の gut では単母音 u の表記がなされているが、他の版では gůt と二重母音で表記されたものもある[6]。また vo̊rcht では３人称単数現在に対応する人称変化語尾 t が語幹の t と融合し、Ekthlipsis が起こっている。brest に対して Knape は mangele という接続法１式の注釈を加えているため、原文の brest においても接続法の語尾 e が欠落していることが考えられる[7]。

14行目では sorgen が語尾に d を付加されて現在分詞として使用されており、sorgen「心配する」の内容が waß 以下に述べられる。dass ewig（= nhd. das Ewige）「永遠なるもの」には「神」、あるいは Ewigkeit「（神の）永遠なる世界、死後の生」という意味合いも想定でき、従ってここは「永遠なるものが何を為すか、どう振る舞うか」→「あの世で自分がどうなるか（など、心配することもなく）」という意味に解せられる。これら２行は gut、důt で脚韻を踏む。

O armer narr wie bist so blindt　　15　O armer Narr, wie bist du blind:
Du vo̊rchst die rud / vnd findst den grindt　　Die Räude scheust du ― findst den Grind!
ああ、哀れな阿呆者、なんとお前は盲目か
疥癬恐れてかさぶたできる

15行目の wie 以下では主語が省略され、定動詞 bist によってのみ主語の du が特定できる表現がとられている。また blindt「盲目の」には語尾に t が付され、無声化が表示されている。16行目の vo̊rchst は Nhd. では fürchtest となるように、語幹の t が消失している。また rud は nhd. Räude, Raude となり、u → äu, au へと二重母音化される。grindt「かさぶた」も前述の blindt 同様、無声化を示す t が付加されている。そしてこの行には、「疥癬を恐れ、それを掻いてさらにひどくなりかさぶたができる」

という結果、つまり「小難をのがれて大難にあう」という意味合いが込められているものと読める[8)]。ここでは blindt、grindt で脚韻を踏んでいる。

Mancher mit sunden gůt gewynt	Ein andrer sündigem Gut nachrennt,
Dar vmb er jn der hellen brynt	Wofür er in der Hölle brennt:
多くの者が罪を犯して財を手に入れ	
そのことゆえに、地獄で焼かれる	

18行目では、分かち書きされた dar（vmb）が関係代名詞として機能し関係文を作っているため、定動詞 brynt が後置されたものと思われる。17行目は副文ではないがこの brynt と押韻するために gewynt が後置されたと推測される。この定動詞 brynt は mhd. brinnen「燃える」に対応するもので、Nhd. では brennt となるが、幹母音がまだ y（= i）の状態を残している。また、女性 3 格の der hellen（= nhd. der Hölle）には弱変化語尾 n が付されているが、Frnhd. の弱変化女性名詞単数形は Nhd. へ移行する中で無語尾で用いられるようになる。17、18行目は gewynt と brynt で脚韻を踏む。

Ⅳ

Syn erben achten das gar klein		Das achten seine Erben klein,
Sie hülffen jm nit mit eym stein	20	Sie helfen nicht mit einem Stein,
それを彼の相続人はまったく気にもかけない		
墓石を建てて彼（故人）を供養することもなく		

19行目の所有代名詞 syn には複数 1 格の格変化語尾 e が脱落しており、また Nhd. では sein へと二重母音化する母音 i がここでは y で表記されている。このテキストでは sin と syn とで表記に揺れが見られる。

20行目の定動詞 hülffen「助ける」について Junghans / Mähl による現代語訳では、3 人称複数直説法現在の helfen で訳されている。Mhd. ではこの場合 helfent となるが、原文では hülffen という接続法過去（2 式）の形式をとっており、ここでの用法には直説法と接続法の両方の可能性が考えられる。また mit eym stein では einem が韻律の関係から eym と短縮され、さらに意味的には stein について Bobertag が etwas Wertloses「価値のないもの」という注釈をつけていることから、ここには阿呆者の故人に対する相続人の冷たい態度が見て取れる。これらの行は klein、stein で

脚韻を踏んでいる。

Sie lo̊ßten jnn̄ kum mit eym pfundt　　Sie spendeten kaum ein einzig Pfund,
So er dieff ligt in hellen grundt /　　Und läg er tief im Höllengrund.
彼らは故人のためにたった１ポンド（の重さのお金）も出すことすらない
故人は地下深い冥土で寝ているというのに

21行目の jnn̄ は前置詞ではなく、この場合は Nhd. の人称代名詞 ihn として機能しており、また kum は nhd. kaum へと二重母音化する前の長母音の状態で表記されている。不定冠詞 eym についても20行目と同様、前置詞 mit を伴って mit eym（= nhd. einem）pfundt という短縮形で現れている。ここでは、あの世に行った阿呆者を供養するために遺族が出すお金（Ablassgeld「贖宥献金」）として pfundt という語が記述されている。Junghans / Mähl によると、pfundt は重さの単位で、この詩が書かれた当時は貨幣の鋳造の質が均一ではなく、重さで計算したという習慣がこの記述からわかる。1 pfundt は Straßburg では 2 Gulden と少額だったようで、また、この語の語尾には無声化の t が付加されている。

22行目の so は認容を表す従属接続詞として副文を導くと考えられるが、ここでは定動詞 ligt が後置されていない。dieff「深く」については、mhd. tief, nhd. tief のように語頭が t に子音推移するがここではこの変化が起こっておらず、西中部ドイツでは[d]が[t]に変化しなかったとも言われている[9)]。また hellen grundt「地獄の地の底」でも、無声化の t が語尾に添加されている。ここでは pfundt、grundt で脚韻を踏む。

Gib wil du lebst durch gottes ere　　Gib, da du lebst, zu Gottes Ehr,
Noch dym dot wirt ein ander here /　　Nach deinem Tod wird ein andrer Herr.
（神に）与えよ（供えよ）、神の名誉によりお前が生きている限り
お前の死後には別の持ち主があらわれる

23行目の gib は文中の du に対する命令の形で現れており、「神にこそ与えよ」という意味で用いられ、それに続く wil は mhd. wile、あるいは nhd. Weile に対応して die wile daz～（「～の間に、～する限り」）という従属接続詞として機能している。Knape はこれに対して „bei Lebzeiten“「存命中に」という説明を加え、さらに durch gottes ere については „um der Ehre Gottes willen“「神の名誉のために」と解釈しており、ここでは durch ～ willen のように durch と um の交換が可能である。

24行目の noch dym dot は Nhd. ではそれぞれ nach deinem Tod に対応し、noch－

nach の母音変化、dym－deinem の語形変化、そして22行目の dieff と同様、dot－Tod の語頭音［d］から［t］への変化が Nhd. との比較において認められる。また Zarncke は、„Nach deinem Tode wird dein Gut einen andern Herr heiszen.“「お前の死後に、お前の財産は他人を主人（持ち主）と呼ぶだろう。」ということわざを引用し、この行の意味的な補足説明を行っている。これらの行では ere と here（= mhd. herre）で脚韻を踏んでいる。

Eß hat keyn wyser nye begerdt	25	Ein Weiser hat noch nie begehrt
Das er mo̊cht rich syn hie vff erdt		Nach Reichtum hier auf dieser Erd,
賢者は決して望んだことなどない		
この世で金持ちになれることを		

25行目文頭の eß（= nhd. es）は仮の文法的主語で、後続の wyser（= nhd. weiser）「賢者」が本来の主語となるが、ここではこの主語 wyser が keyn で打ち消され、さらに文全体が nye で否定されているため二重否定の形になっている。しかしこの場合は肯定の意味ではなく、これら２つの否定語により否定の意味がさらに強調されていると考えるのが妥当であろう。また、begerdt（< mhd. begern）の語尾 dt では d が本来不要であるはずだが、26行目の erdt と押韻するため添えられたものと考えられる。

26行目の das（= nhd. dass）以下は25行目 begerdt の目的語となる副文であるが、可能を表す助動詞 mo̊cht（< mhd. mugen）が従属節の中で正置され、定形後置が成立していない。またここでは rich（= nhd. reich）、syn（= nhd. sein）、vff（= nhd. auf）というように、それぞれ Nhd. で二重母音化する前の語形が保たれている。さらに y と i の表記に関してはこの詩の中で syn が２例、sin が５例見つかり、また eyn と ein の併存も見られるなど、書記法の揺れがここでも認められる。

V

Sunder das er lert kennen sych	Wohl aber, daß er selbst sich kenne:
Wer wys ist / der ist me dann rich /	*Den* Weisen mehr als reich du nenne!
そうではなくて、己を知ることを（望んだのだ）	
賢明なる者は、金持ちに勝る	

27行目の sunder は Nhd. では sondern となり、u → o へと舌の位置が下がる

(Senkung) 現象が起こる。これに続く das（= nhd. dass）は25行目の begerdt に続く従属節だが、ここでも定動詞 lert が正置され、定形後置は行われていない。またここで用いられている lert kennen は Nhd. の kennen lernen「知るようになる」に対応するが、nhd. lernen「学ぶ」に対して原文では lert（= nhd. lehrt「教える」）が使われており、両者が混同されたものと思われる。

28行目では Nhd. と同じ不定関係代名詞 wer が用いられているが、これに続く副文内では定動詞 ist が後置されており、ここでは定形後置による枠組みが成立している。また me dann では dann が「～よりも」の意味で用いられており、これは10行目の dan（= nhd. dann）と同様であるが、Nhd. の als はまだ現れていない。「～よりも」の意味で als との重複を避けるため現代語でも用いられる語は denn だが、Frnhd. では本来同義であった dann とまだ意味的に分岐していない状態にある。ここでは sych と rich で押韻している。

Crassus das golt zů letzst vßtrangk	Zuletzt geschah's, daß Crassus trank
Noch dem jnn hat gedürstet langk / 30	Das Gold, wonach ihn dürstet' lang;
クラススは（溶けた）金を最後に飲み干した	
ずっと渇望してきた金を	

29行目末の vßtrangk は Nhd. の austrinken「飲み干す」の過去形に対応する分離動詞で、ここでは vß と trangk が別々に独立した語の組み合わせとしてではなく一語の概念として用いられており、この点で現代語に近づいた用法であると思われる。この行は Junghans / Mähl、Bobertag によると、パルティアのオロデス（２世）が、カラエ（Karrhä）で戦いに大敗し捕らえられたローマの政治家クラススの口に、溶けた金を注ぎ込んだと言われる歴史上のエピソードが基礎となっている。

30行目の noch が Nhd. では nach へ母音変化するのは24行目の noch と同様の現象である。この行では現代語にも見られる „Es dürstet ihn nach～（= Ihn dürstet nach～)“「～を渇望する」という表現が用いられており、noch dem の dem は関係代名詞とも考えられるが、関係文内での定形後置は行われていない。また、lang の語尾に無声化の k は不要だが、29行目の vßtrangk と押韻するため付加されたものと思われる。

Crates syn gelt warff jn das mer	Doch Crates warf sein Geld ins Meer,
Das es nyt hyndert jnn zůr ler /	Das hindert' ihn beim Lernen sehr.
クラテスは自分のお金を海に投げ捨てた	

その金が勉学をする彼（クラテス）の妨げとならないように

31行目では、ギリシャ・テーバイの哲学者クラテスを主語として、それに続いて現れるはずの定動詞 warff が第 2 位に正置されておらず、Frnhd. の韻文における定形の位置は不安定である。32行目の das はここでは nhd. damit に対応し従属接続詞として用いられているが、定動詞 hyndert は副文内で後置されず枠構造は形成されていない。また、行末の ler は mhd. leren「教える」の名詞形 mhd. lere「教え」に対応するものと考えられるが、この場合「学ぶ」という意味の mhd. lernen を名詞的に用い、「学ぶ際に」という意味を表現しているため、27行目の lert と同様に、「教える（lehren)」と「学ぶ（lernen)」とで混同が起きているように思われる。これら 2 行は mer、ler で脚韻を踏む。

Wer samlet das zergenglich ist	Wer sammelt, was vergänglich ist,
Der grabt sin sel jn kott vnd mist	Begräbt seine Seele in Kot und Mist.
むなしきものをため込む者は	
ぬかるみと糞尿の中に己の魂を葬る	

33行目の das はここでは不定関係代名詞 was として機能しており、これに続く関係文内では定形後置が行われている。28行目の „Wer wys ist“ でも定形後置が行われており、いずれの場合にも定動詞が ist という共通点が見られる。また、「むなしい、はかない」を意味する zergenglich（= mhd. zergenclich）について、Nhd. では前綴りに zer-はとらず vergänglich の形で存在する。Grimm によれば、この zergänglich は「ahd. と mhd. では類義語の vergänglich よりも頻度の点で優勢な、聖書的、宗教的領域の表現」と説明されている。[10)]

34行目の graben については 3 人称単数現在のため、Mhd. では grebet、Nhd. でも gräbt と幹母音がウムラウトするがこの箇所ではウムラウトが起こっておらず、4 行目と同様に Frnhd. での幹母音変化における不安定さ、あるいは地域差が見て取れる。これに対して現代語訳では「埋葬する、葬る」という意味を表現するために前綴り be-を付加し、さらにウムラウトした begräbt という形を用いてこの箇所は訳されている。ここでは ist、mist で脚韻を踏んでいる。

おわりに

人間の強欲さを題材にしたブラントの詩を本稿では読んできたが、言語的側面では、格変化語尾の脱落、二重母音化する以前の語形、不定関係代名詞としての der と wer の併存、平叙文および副文における定動詞の位置の不安定さ、強変化動詞の３人称単数現在形において地域差により幹母音にウムラウトが起こらない現象、３人称変化語尾 t に関する Ekthlipsis、二重否定による否定の強調など、現代語とは異なる初期新高地ドイツ語の特徴がこの詩でも認められた。

最後に、この詩のテーマである「貪欲さ」を象徴する金銭、財産を投げ捨てたクラテスに関連して、クラテスをソクラテスに書き換えたハンス・ザックスによる次のような一節を付記しておく。なおこれは Zarncke によって引用されたものである。

Socrates warff sein Gelt ins Meer	ソクラテスは自分の財産を海へ投げ捨てた
Da es jhn jrrt an Weiszheit Lehr	それが賢明なる教えにおいて彼を惑わせるから

注：

1）Paul, Hermann: Deutsches Wörterbuch. 10. Aufl. Tübingen 2002. S. 628.
2）工藤康弘、藤代幸一『初期新高ドイツ語』大学書林　1992年、80頁
3）Paul/Wiehl/Grosse: Mittelhochdeutsche Grammatik. 23. Aufl. Tübingen 1989. S. 244.
4）古賀允洋『中高ドイツ語辞典』大学書林　S.628.
5）題詩１行目の zyttlich では t が重ね書きされている。
6）Das Narrenschiff. Hrsg. von Manfred Lemmer. 3., erw. Aufl. Tübingen 1986. S. 12.
7）この brest についても、３人称単数直説法現在の語尾 t に関して Ekthlipsis が起こった可能性が考えられる。
8）Grimm のドイツ語辞典では RAUDE の項に „wer die räude fürchtet, kriegt den grind.“「疥癬を恐れる者はかさぶたを患う」ということわざが引用されている。
Grimm, J./Grimm, W.: Deutsches Wörterbuch. 33 Bde. Leipzig 1854–1971. （dtv 5945）
Bd. 14. Sp. 255.
9）工藤康弘、藤代幸一、前掲書、36頁
10）ein im ahd. und mhd. dem synonymen „vergänglich“ an häufigkeit überlegener ausdruck der biblischen und religiösen sphäre, (Grimm, J./Grimm, W.: a. a. O., Bd. 31. Sp. 685.)

上記以外の参考文献：

Baufeld, Christa: Kleines frühneuhochdeutsches Wörterbuch. Tübingen 1996.
Ebert/Reichmann/Solms/Wegera: Frühneuhochdeutsche Grammatik. Tübingen 1993.
Götze, Alfred: Frühneuhochdeutsches Glossar. 7. Aufl. Berlin 1967.
Koller, Erwin/Wegstein, Werner/Wolf, Norbert Richard (Hrsg.): Neuhochdeutscher Index

zum mittelhochdeutschen Wortschatz. Stuttgart 1990.
Lexer, Matthias: Mittelhochdeutsches Taschenwörterbuch. 38. Aufl. Stuttgart 1992.
Reichmann, Oskar/Wegera, Klaus-Peter（Hrsg.）: Frühneuhochdeutsches Lesebuch. Tübingen 1988.
市村卓彦 『アルザス文化史』 人文書院 2002年
市村卓彦 「ゼバスティアン・ブラントと『阿呆船』」『龍谷紀要』 第28巻 第1号 2006年、27-41頁
井出万秀、須澤通 『ドイツ語史―社会・文化・メディアを背景として』 郁文堂 2009年
伊東泰治、馬場勝弥、小栗友一、松浦順子、有川貫太郎編 『新訂・中高ドイツ語小辞典』 同学社 2001年
川口洋 『キリスト教用語独和小辞典』 同学社 1996年
古賀允洋 『中高ドイツ語』 大学書林 1995年
ゼバスティアン・ブラント著 尾崎盛景訳 『阿呆船（上）』 現代思潮社 1968年
山口四郎 『ドイツ韻律論』 三修社 1973年